

◇拠点形成概要

機 関 名	立命館大学
拠点のプログラム名称	「生存学」創成拠点
中核となる専攻等名	先端総合学術研究科先端総合学術専攻
事業推進担当者	(拠点リーダー) 立岩 真也 教授 外 15 名
〔拠点形成の目的〕 様々な身体の状態を有する人、状態の変化を経験して生きていく人たちの生の様式・技法を知り、それと社会との関わりを解析し、人々のこれからの生き方を構想し、あるべき社会・世界を実現する手立てを示す。日常の継続的な研究活動に重点を置き、学生・P Dによる研究成果を生産することを目指し、効率的に成果を産み出し集積し、成果を多言語化する。 〔拠点形成計画及び進捗状況の概要〕 ■Ⅰ 「集積と考究」：身体を巡り障老病異を巡り、とくに近代・現代に起こったことと言われ考えられてきたことを集積、全容を明らかにし、公開し、考察する。→資料室を設置、関連書籍を収集、発行年順に配架。院生等に貸出。そのデータベースを作成しウェブ上で公開。リスト（HP→「蔵」）にある書籍は開始時の2500冊から4500冊に増加。約3200冊について院生・R Aが作成した書籍別のファイル（頁）有。「老い」「抗精神薬」「人工透析」等の主題別の文献リスト、年表等、人物別のファイル（現在1084名分）を作成・拡充（「人」）。一部について英語版の作成。史料全文の入力・掲載。哲学・倫理学的争点に関わり、生命倫理学会大会や専門雑誌に院生の論考が発表された。雑誌『生存学』創刊号に歴史的検証・倫理的考察を行う論文が掲載され、教員の著作『良い死』『唯の生』等も刊行。東大死生学G C O E刊行のシリーズにも複数の教員が寄稿。企画Ⅲとも連動し19年2月に続き「難病と倫理研究会京都セミナー」を20年2月に開催。 ■Ⅱ 「学問の組換」：差異と変容を経験している人・その人と共にいる人が研究に参加し学問を作る回路・仕組みを作る。当事者と専門家たちを繋ぐ機構を作る。→20～22年度科学研究費・新学術領域研究（研究課題提案型）で「異なる身体のもとでの交信」採択。20年度に総務省、国会図書館等の協力も得て、学術図書のデジタルデータ流通公開の機構を研究、21年度に実証実験を予定。全国の大学・研究機関、点字図書館等との連携構築を目指す。視覚障害をもつ院生・G C O E学術振興会特別研究員の編集で『視覚障害学生支援技法』を21年2月に刊行。大学をはじめとする高等教育機関で学ぶ視覚障害者の支援法を提示。他大学・民間組織とも連携し、重度の全身性障害者等の使い手に合わせた交信手段の提供の仕組みを、工科大学、患者会、I C T関連N P O等と連携して研究、実験。学会等で報告。音声認識ソフトを使って学会大会等の報告の即時音声字幕化の仕組みの試行を開始し、開発企業と意見交換。ウェブを介した遠隔交信、実況中継を主催のシンポジウム、学会などで実施。『現代思想』20年3月号特集「患者学——生存の技法」に協力、拠点関係者の論文、インタビュー掲載。 ■Ⅲ 「連帯と構築」：このままの世界では生き難い人たちがどう生きていくかを考え、示す。各々の学問領域で成果を発表しつつ具体的な案を提示する。→生存学センター報告『国際シンポジウム「健康・公平・人権：健康格差対策の根拠を探る」』『多文化主義と社会的正義におけるアイデンティティと異なり』に記録掲載の国際シンポジウム（20年2月、3月）他を開催。日本A L S協会と「東アジア難病患者ネットワーク構築に関する研究」（20～22年度）を開始、21年2月に国際会議を開催、東アジア地域A L S協会の患者らが報告した。また、京都・滋賀他で本人の地域生活を支援しつつ、医療福祉関係者と共に難病者の介護・支援体制の現状と問題点を明らかにし、あるべき仕組みを提示する共同研究を厚生労働省や民間の研究助成も得て継続中。神経性難病関連（企画Ⅰの倫理的考察含む）で19年に23、20年に28の学会講演・報告、論文等を発表、21年は3月までに9、20年分は英語・中国語版の活動概要をHP掲載。『現代思想』20年2月号特集「医療崩壊——生命をめぐるエコノミー」に協力、拠点関係者の論文、インタビュー掲載。理論的著作としてA・センとの共著『福祉と正義』他。岩波書店のシリーズ『ケア』にも複数の教員が寄稿。<i>World Poverty and Human Rights</i> (Pogge, T. W.) の院生による共訳終了。<i>Real Freedom for All</i> (Van Parijs, P.) の院生による翻訳が完成。視覚障害をもつアフリカからの留学生、アフリカでN G O活動をしてきた人たちを招き座談会等を開催（19年6月以降4回）。『時空から／へ——水俣／アフリカ……を語る栗原彬・稲場雅紀』『流儀』として刊行。アフリカに関する情報をN G Oの協力を得て収集、HPに掲載。現在約800万字。韓国から障害をもつ研究者他3名を招聘、研究会を開催。21年は大規模な催しを韓国で開催予定。教員の著作の韓国語訳の出版計画が進行中。 * 学会報告や論文以外に公表された成果多数（表紙→「成」）。19年は469、20年は535、21年は3月末現在177。その一部に生存学研究センター報告8冊。多くは院生・P Dが編者。上に題を記さなかったものに『P T S Dと「記憶の歴史」——アラン・ヤング教授を迎えて』『不和に就て——医療裁判×性同一性障害／身体×社会』『特別公開企画「物語・トラウマ・倫理——アーサー・フランク教授を迎えて」』『ケアと感情労働——異なる学知の交流から考える』がある。	

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価

(総括評価)

当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。

(コメント)

「生存学」創成を目指す拠点として多様で活発な事業が推進されており、社会問題に基づく視点や「生存学」に関する各ディシプリンの境界領域から生み出される課題を整理し、新たなパラダイムの構築を目指すものとして継続的な努力が行われてきたと評価できるが、これまでの拠点活動について、対外的に理解可能な説明が行われたとは言い難い。

大学の将来構想と組織的な支援については、学長が指導力を発揮して拠点リーダーを支え、事業推進担当者による強固な推進体制を深化させることが必要であり、また、本事業終了後においても運営及び資金面の両面から「生存学」創成に継続して支援することが必要である。

拠点形成全体については、相当の成果は認められるが、その成果をより系統的に整理して提示すべきであり、また、「生存学」のグローバル化や多言語を含む国際的発信については、十分な水準とは言えず、今後の具体的な計画と改善が必要である。更に、拠点運営のために採択時において計画されていた評価委員会が設置され、拠点活動の自己評価及び外部評価を実施する必要がある。

人材育成面については、大学院学生・若手研究者は自主的に研究成果をあげ、本拠点を意義のある教育・研究の場として捉えており、事業推進担当者間の連携に基づいて、一層の成果をあげることが期待される。

研究活動面については、「生存学」に対する着地点を意識しつつ、事業推進担当者の更なる相互協力により、「生存学」創成が対外的にも明確になるよう努力されるとともに、国際的な「生存学」における研究の交流と連携の推進が必要である。

補助金の適切かつ効果的使用については、拠点全体の目標達成と円滑な運営を実現するため、特に、拠点としての図書設備及び視聴覚設備の充実などについて、大学の継続的な支援が期待される。

留意事項への対応については、「生存学」創成について、モデルや可視化による方法を導入するなど、対外的にも十分に理解される説明の方法を工夫する必要がある。

今後の展望については、社会問題からの視点や「生存学」を包摂する諸学問の境界領域を研究課題とする新たなパラダイムを形成する前向きなプログラムであることから、助言に沿って改善されることが必要である。